



最近の中国では、テレビドラマ化された途端、その原作が飛ぶように売れる現象がしばしば起きているが、雑誌『文藝春秋』に連載当初から反響を呼び、連載終了後に上・中・下の三巻の単行本として上梓されるや、ベストセラーとなり、その後のテレビドラマ化によってさらに大きな反響を呼び、多くの読者の涙をさそったのが、山崎豊子作『大地の子』である。

テレビドラマ『大地の子』が最初に放映されたのは1995年の11月から12月にかけて、毎週土曜日の午後9時から、合計7回の放送だった。回を追うごとに視聴者の大きな反響を呼び、その年の暮、急速深夜11時過ぎから、再放送、その後も間隔を置いて、再々放送され、昨年12月にも衛星放送で夜7時30分から放送された。このように何度も再放送され、また見る度に感動するドラマを筆者は他に知らない。

主人公の中国残留日本人孤児・陸一心を演じた上川隆也はこのドラマのために中国語を猛特訓し、見事自分のものにした。陸一心の中国人養父を演じた朱旭は映画『心の香り』などで有名なベテラン俳優で、その演技の素晴らしさはとても一言では言い表せない。陸一心が日本人であるが故にスパイの嫌疑をかけられ、内モンゴルに流刑され、辛酸を嘗めつくし、やっと晴れて北京駅に帰ってきた時、待っていたのは、いつ帰るか分らない息子を北京まで出向き、一週間も待ち続けた父だった。この二人の感動の再会シーンはいつ見ても泣かされる。

「一心」

その声の方を見ると、髪の白い老人がたっていた。

「一心、わしだ」

父、陸徳志であった。

「父さん！」

「息子よ！」

一心の体が震えた。

徳志もわななき、人

混みのなかで、親子は抱き合った。あとは言

葉もなく、互いの体を手でまさぐった。一心が抱き締めた父の体は痩せ細り、小さくなっていた...

なぜ、『大地の子』にこれほどまでに感動させられるのか。中国人養父母と日本人孤児との愛、実の親子とわかってからの肉親の情などが描かれているのだが、作者の丹念な取材がドラマチックな構成をむりなく読ませる迫力につながっている。

作者山崎豊子は取材から完結まで実に八年を費やした。中国取材は1984年6月から始まったが、取材の壁は高く険しい。ほとんど困りぬいていた作者を助けてくれたのが胡耀邦総書記だった。

「中国を美しく書いてくれなくてもよい。ただ、それが真実であるならば」と言った胡氏の理解と英断で外国人が立ち入れなかった地区の取材が許可され、現地取材は三年間にわたった。『大地の子』執筆の原動力について、山崎豊子は戦争に対する怒り、権力の告発、そして贖罪意識であると語っている。「今日の日本の平和というのは、そういう孤児たちを戦後四十年近くも捨てておいた犠牲の上で成り立っていることを反省したいです。日本人はみんな健忘症なんではないでしょうか。それとも人道主義欠如症なんではないでしょうか。」本書が語りかけてくる問題にはつらくて重いものがある。『大地の子』に登場する主人公の妹・あつ子のように、学校にも通わせてもらえず、読み書きもままならない戦争孤児が中国の僻地にはいまだ多数残っている。

今、韓国・中国の間から、わが国の歴史教科書問題の記述に関して修正を求める意見が出ている。このような今こそ、中国人とは、日本人とは、を問う『大地の子』を読んで、作者の主張に耳を傾けようではないか。

かげやま たつや（助教授・中国文学）